

String
Fiction Series

5

不協和音



YAMANAKA TOMOTAKA

山中與隆

Duo-Yamanka

不協和音

山中與隆

目次

不協和音

1

$\left[\begin{array}{c} \text{—} \\ \text{—} \\ \text{—} \end{array} \right]$

1

$\left[\begin{array}{c} \text{—} \\ \text{—} \\ \text{—} \end{array} \right]$

52

$\left[\begin{array}{c} \text{—} \\ \text{—} \\ \text{—} \end{array} \right]$

58

〔十〕 〔九〕 〔八〕 〔七〕 〔六〕 〔五〕 〔四〕

144 124 93 64
 138 112 84

編者あとがき	〔十五〕	〔十四〕	〔十三〕	〔十二〕	〔十一〕
	249	238	224	212	205
					254

不協和音

山中與隆

1

〔一〕

柏木たちが所属しているオーケストラでは、次年度の選曲の話で盛り上がっている。定期演奏会後の

打上げの席でのことだ。

「《火の鳥》まで来たんだから、そろそろマーラーをやつてもいいよな。《交響曲第五番》なんかいいとおもうよ」

編成も、演奏時間も大掛かりな曲ばかりを提案しているホルンの松本が、彼らしい発言をした。

「逆じゃないの。シヨスタコーヴィチの《交響曲第五番》、ラフマニノフの《交響曲第二番》、ストラビ

ンスキーの『火の鳥』と来たんだから、こんどはモーツァルトとかベートーヴェンなど古典の交響曲をやるべきでしょ」

とバイオリンの山下。山下と松本は、選曲の話になるといつも対立する。松本がすかさず、

「山ちゃんがそれ言い出すと、わが金管楽器集団は一年間お休みしなさいと言われているように感じちゃうんだよね」

確かに、このオーケストラは木管楽器、金管楽器、打楽器はそれぞれ集団と言えるほどたくさん的人数を抱えている。どんな曲をやることになっても基本的に全員舞台に乗れる弦楽器と違ってモーツァルトやベートーヴェンを取り上げたのでは、木管楽器やトランペットは二本ずつ、ホルンは四本の場合もあるが、トロンボーンは使われてない曲も多い。ブラームス、ドヴォルザーク、チャイコフスキーなどロ

マン派の曲になると多少管楽器の数や種類は増えるが、基本的にはベートーヴェンと大差ない。ホルンが六本とか八本とかで、それに応じて他の管楽器も多くなっているマーラーとは大違いである。だが山下は持論を吐く。

「やっぱり、オーケストラは弦楽器が基本でしょ。弦が存在感を示せる曲も取り上げるべきですよ」
「編成の大きな曲をやっても弦楽器の人たちはあぶ

れないじゃないですか。それから、失礼ながら今のうちの弦楽器群は、モーツァルトで存在感を示せるほど充実してないのじゃない？」

と松本。

確かに、松本が言うように弦楽器群は第一バイオリン、第二バイオリン、ビオラ、チェロとどのパートをとつても質量ともに不足している。本番では近隣のオーケストラから応援を頼んで何とか乗り切つ

ているというのが実情である。

山下はだからこそ弦楽器が主体のような古典の交響曲を取り上げてしつかり鍛えるべきだと思つてい
るが、それを言つてもこのところ勢いづいてい
る管
楽器の連中には通用しない。

「そんなことよりも弦楽器のメンバー集めに、もつ
と力を入れないとどうにもならないのじゃない」
と一蹴されてしまふに決まっている。言いたくてう

ずうずうしていた女性の論客であるオーボエの今井が、待ちきれないように、

「さつき誰かが、「そろそろマーラー」と言つてたけど、それを言うなら、そろそろスメタナの《わが祖国》全曲でしょ」

「それなら第二曲だったっけ、《モルダウ》やったばかりじゃないの」

「やったばかりじゃないわよ。もう二年前のことよ。」

《モルダウ》一曲でお茶を濁されたんじゃないわ。あれは連作交響詩なんだから、六曲全部やって初めて意味があるのよ」

「誰だったか、スメタナは弦がめっちゃめっちゃ難しいって言ってなかった？」

「じゃ、マーラーの《五番》は易いって言うの？」

「さつき山下さんがモーツァルトとか言ってたけど、あれこそ弦は最高に難しいんじゃないの？」

「わたしはモーツァルトって言つてないでしょ」

こういう議論に入り込むときりがない。彼らアマチュアにとつては、一流の曲はどれも難しいことは間違いない。ただそれぞれの意見を言う人の『難しい』の意味が少しずつ違っている場合が多い。モーツァルトが最高に難しいと言う意見には、速いフレーズも含めてすべての音が磨き抜かれていなくてはならない、そうでないとモーツァルトの音楽になら

ないと言う主張が含まれているのである。逆にチャイコフスキーやマーラーなどの大編成の曲の場合は、細かいところは少々どうなつていても全体の聴き栄えに影響しないと言うのである。これはどちらも当たつていないことも無いが、どちらも正しいとも言えない。モーツァルトでも許容範囲以内であれば多少の乱れがあつても、音楽の雰囲気や勢いを表していればそれなりの聴き栄えはする。もちろんプロは

そんなことでは許されないが。また大編成の曲でも、一流プロの弦の鮮やかな演奏で聴くと、弦楽器の存在が如何に音楽をハイレベルにしているかがよくわかる。つまりどちらの意見も、我田引水の都合の良いところを主張しているに過ぎない。

転勤した前コンサートマスターの後を受けて新しいコンサートマスターに内定している柏木健一は、敢えて意見を挟まなかった。酒の勢いで解決するよ

うな問題ではないと思つてゐるのだ。

来週新役員などを決める総会があり、そこで柏木のコンサートマスターが正式に決まるはずである。またそこで決まつた新役員を中心に今後のスケジュールが作られる。そして選曲会議は役員全員と一般の団員の希望者が参加して行なわれる。この選曲会議は恒例となつていて、みな楽しみにしている。

議論しているのは阿弥陀市民交響楽団と言うアマ

チュアのオーケストラである。このちよつと変つた名前は、シンボルのように街の真ん中にポコンと盛り上がっている阿弥陀山に由来している。略して阿弥響と称している。この街にはこの地方では唯一のプロのオーケストラがあり、こちらは地域名を取つて西南フィルハーモニー交響楽団と言ひ、一般には西南フィルで通つている。プロとアマチュアの演奏団体なので、お互いの中に特段の関係はないが、阿

弥響のメンバーの多くが西南フィルの奏者の個人レッスンを受けているだけでなく、トレーナーとして練習指導に招くこともある。

柏木は自分の理想の次期プログラムを構想しているとところだ。彼が考えているのは、オールブラームプログラム、つまりブラームスプロトと言うやつである。

まず《悲劇的序曲》で幕を開け、《バイオリン協奏

曲》を二番目にする。ソリストは一年前から柏木がレッスンを受けている先生の秘蔵子の高校三年の女の子にしたいと考えている。先生も彼女ならきつと良い演奏をすると太鼓判を押している。そしてメインは《交響曲第三番》である。このオーケストラでは、ブラームスの作った四つの交響曲で、《第一番》、《第二番》、《第四番》をここ十年以内にやっているが、《第三番》だけは、オーケストラ創設以来まだや

ったことがない。しかもブラームス好きの柏木がブラームスの交響曲の中で最も好きなのが《第三番》なのである。柏木はアンコール曲も考えた。このよ
うなプログラムでは同じブラームスの《ハンガリー舞曲》から一曲と言うのが定番だが、柏木は敢えてその考えにはよらないで《大学祝典序曲》をしたいと思います。アンコールとしてはやや長めだが、プログラム全体の納まりと各曲の並びも悪くないと

考えている。

翌週、オーケストラの総会が開かれ、柏木健一は予定通り次期コンサートマスターに指名された。そしてメンバー全員の注目度が高い選曲会議がさらにその翌週に開かれた。

役員だけでなく多くの一般団員も参加している。また意のある者は推薦したい曲のスコアや、中には

音源まで用意してきている者もある。もつとも会議の時間にも制限があるので、それぞれが推薦したい曲をみんなに聞かせている時間はない。大抵は参加者の曲に対する知識が頼りである。ただ楽器の編成や、特別難しそうなところをスコアで説明するのに役立つこともある。もちろん推薦者は用意したスコアで、その曲の何処どこは難しくて歯が立たないと言うような反対意見が出たときに、あなたの言う難

しいところの譜面はこうなっているから、絶対に出
来ないとは言えないなどと反論するときには使うので
ある。また、あまり知られていない曲を推薦する場
合には音源も効果を發揮する。しかしアマチュアオ
ーケストラでは、そのような曲が選ばれることは非
常に稀である。

会議の最初に司会者が推薦曲の提案を求めると、
先を争うようにさまざまな曲が提案された。記録係

がそれらをホワイトボードに書き出していく。瞬く間にメインプログラム、サブプログラムなど思い思いの推薦曲が二十曲以上もボードに書き出された。

記録係は提案された曲を手際よくメインプロ、サブプロなどに自分の判断で書く場所を変えて書いていく。ときどき提案者から、

「それはメインプロにしてください」
などと声がかかったりする。

演奏会の冒頭かアンコール向きかと思われる短い曲から、一時間以上かかるような長大な曲まで四十九曲近く出されたところで、ほぼ出席者が考えてきた曲は出尽くしたのか、新たな提案の声は途切れた。

司会者が

「もうないですか？」

と言うと、ポツリポツリと曲名をあげる者がいたが、ほぼ出尽くしたようだ。毎年これくらいの曲が提案

されて、これから絞込みの話し合いが始まるのである。この段階までは、一昨年演奏した曲をあげる者があつても、声が出たものはすべてボードに書き出されている。しかしそのような曲は、絞込みの最初に姿を消す。一年に一回の演奏会しかないこのオーケストラでは、これらの中から一晩のプログラムに納まるように絞り込むのはかなり大変な作業である。

「さあ、これからだ」

と言うように、みんなの目が光り始める。

司会者から、まず今度の演奏会のコンセプトをどのようなものにするか話し合おうと提案があり、異議無しの声があつてそうすることになった。

先鞭を切ったのは先日の打上げで今度はマーラーがやりたいと言つていた松本が手を上げた。松本はホルン奏者だ。

「いろいろ意見はあると思いますが、わがオーケス

トラのように大きくなつた楽団としては、やはり中心に大きな編成の曲を持ってきて、折角メンバーになつている人たちに、できるだけたくさん舞台に乗ってもらえるようにすべきだと思います。そうしておいて、サブの曲でバランスを取るのがいいと思います」

彼の周りに陣取っている数人から拍手が湧き起こつた。その熱気に会場全体から笑いが起きた。柏木

は考えてきたプログラムのすべてを提案したが、ここではまだ発言しない。柏木の予想通り山本が手を上げた。山本はチェロパートのトップに先週決まつたばかりである。

「管楽器、打楽器のメンバーが多いことは確かです。だからと言ってその人たちの出番を優先して選曲している、いつも大編成の曲しかできないことになります。そういう人たちは舞台に乗るチャンスが少

ないことを承知の上で入団しているはずですから、毎年出番がなくても仕方ないのではないかと思ひます」

「団費は同じに払って、出番がない年があるのはおかしいですよ。入団を許可された以上は平等に舞台に乗る権利があると思ひます」

「入団を受け付けるときに、パートによつて人数制限をつけるべきだったのじゃないですか」

いきなりシビアな議論が始まった。あちこちで私語が出ている。

「例えばホルンが六人いるところに七人目の入団希望者が来たとするでしょ。その人がもともといる六人よりもかなり上手いことがわかっている場合、断わりたくないよね」

これは現実に二年前にこのオーケストラであつたことである。それで現在ホルンは七人である。実は

そのあとまた一人のホルンが入団を希望してきたが、高校のブラスバンドで吹いていたがまだ自分の楽器も持っていない初心者の女性だった。入団したら楽器をかうつもりだと言ったそうだが、その子は入団を断わられた。弦楽器はほとんど経験年数や技術レベルに制限なく受け入れているのに対して、楽器ごとの必要人数の少ない管楽器は厳しい。特に打楽器は多くの曲がティンパニー一人ですむのだからさ

らに厳しい。ちなみにこのオーケストラに打楽器パートとして在籍する団員は四人いる。シロフォンやピアノが弾けるのだったら、時には重要な出番があるが、今いる三人は楽器が何も出来ないから打楽器ならと言つて入つたメンバーだ。

柏木は、この議論の流れだと自分のプログラム案は支持される可能性はないと思つた。ブラームスの《交響曲第三番》の管楽器、打楽器の編成はフルー

ト二、オーボエ二、クラリネット二、ファゴット二、
コントラファゴット一、トランペット二、トロンボ
ーン三、ホルン四、ティンパニー一対である。オー
ソドックスな古典的な編成で、決して松本が喜ぶよ
うなものではない。おまけにこの楽団にはないコン
トラファゴットが必要である。コントラファゴット
は、ブラームスの《交響曲第一番》と《交響曲第四
番》をやったときにも必要だった。そのときは地元

のプロオーケストラの奏者に応援出演してもらった。

柏木がやりたいと思っている曲の編成だが、《バイオリン協奏曲》はフルート、オーボエ、クラリネット、ファゴット、トランペットが各二、ホルンは四、それにティンパニー一対である。《悲劇的序曲》は《交響曲第三番》とほぼ同じでそれにピッコロとチューバが一本ずつ加わり、コントラファゴットはない。柏木がアンコールに考えた《大学祝典序曲》はこれ

も《交響曲第三番》とほぼ同じで、ピッコロ一本が
必要なのとトランペットが二本ではなく三本となつ
ており、バスチューバが一本いる。打楽器はティン
パニーが一對ではなく三個必要で、他に大太鼓、ト
ライアングル、シンバルが必要である。これだけあ
れば曲によつてメンバーを代えればかなりの管楽器
奏者に出番が与えられる。柏木は管楽器奏者が失業
すると言う意見には充分対抗できると考えた。

先ほどこからの議論は続いていったが、結局プログラム全体で楽器編成のバランスを取ると言う考えが支配的になっていった。柏木は彼のプログラム案にとって好都合な方向になってきたと思った。さらにさまざまな意見が出されたが、結局この方針に沿って具体的な選曲に進むことになった。方針は決まったが具体的な曲名が上がり始めるとほとんど方針など何処に行ってしまったのかと言うような状態で、初め

出された曲がほとんどもう一度出てきたと言う感じになつた。

それらのなかから、司会者の進行によつて方針に照らして排除すべき曲が一つずつ消されていく。消されることに納得して従う者もいるが、頑固に抵抗する者もあつて、そう言つた曲は結論を先送りにしてホワイトボードから消されずに残つた。

方針に照らして消された曲を除いてもまだ十八曲

が残った。メイン曲と考えられるのが十曲、サブメ
インと考えられるのが六曲、演奏会の最初かアンコ
ールと考えられるものが二曲である。最後の二曲は
柏木の提案したブラームスの序曲二曲であつた。こ
の短い曲の提案が少ないのは、メインとサブが決ま
れば、それからでもいいと考える者が多いせいであ
る。

「さて、それではとりあえずメイン曲を決めましょ

う」
と司会者。そろそろ議事進行を急ぐ必要もある時間になってきた。

柏木は、自身のプログラム案の四曲を上げた以外は発言しなかった。方針に沿った絞込みでもその四曲は生き残っている。

「メイン曲は多数決で決めたらいいと思います」と声が上がりに、

「賛成」

の声も何人かから出たので、

「ではそうしましょう。挙手は一回だけにします」

ホワイトボードのメイン曲に分類された中から書かれている順に挙手による投票が始まった。挙手が少なくて多くてもどよめきのような声が上がった。

挙手による投票の結果、十曲のうち十票以上の曲が三曲、後は数票であった。最も多かったのはマーラ

ーの《交響曲第五番》で二十六票、二番目はブラームスの《交響曲第二番》とスメタナの《わが祖国 全曲》で二十票、そのあとに十票前後からゼロ票までが並んだ。比較的票を集めたのはリヒャルト・シュトラウス、チャイコフスキー、ブルックナー、マーラーの《大地の歌》、ドヴォルザーク、ベートーヴェン、などであつた。

「ご覧の通りですが、これで決めてしまいますか。

それとも例えば十票以上の三曲で決選投票しましよ
うか？」

「決選投票」

「決選投票」

の声が上がったので、司会者は上位三曲による決選
投票をすることにした。そして、

「決選投票の前に、何か言いたいことがあつたらど
うぞ」

と発言を促した。

「まだサブ曲も決めなくちゃならんから、投票しましょう」

そう発言したのは、マーラーを提案した松本である。柏木が手を上げた。

「僕はブラームスを提案していますが、僕の場合メインだけでなく、ブラームスプロを想定した提案なので、投票の時にはそのことも考慮してください」

「じゃ、柏木さんはメインからアンコールまで一度に決めて欲しいということ？」

「いや、そうでなくても構いませんが、その線もありということをお願いします」

柏木がそう言ったとき、松本は小さな声でせせら笑うように

「ずるいことするやつだ」

と言ったが、これは会場のみんなに聞こえた。柏木

はムツとしたが何も言わなかつた。

司会者の発言で、メイン曲の決選投票が行なわれることになった。今度も挙手は一回だけである。この時点で、四位以下の曲も大掛かりなロマン派後期の大曲が並んでいることから、松本はマーラーの勝利を確信していた。柏木も勝てないだろうと思つた。

ところが、松本のせせら笑うような独り言が形勢を一転させていたのである。何人かの者が、多くを

語らない柏木に対して松本よりも好印象を持ったのである。もちろんそれだけでなくオールブラームスと言うのも悪くないなと考えたこともあったのか、投票の結果はブラームスが二十六票、マーラーは十八票、スメタナが十二票であつた。

「ではメイン曲は・・・」
と司会者が言いかけたとき、松本が手を上げながら立ち上がった。

「ひとこと言わせてください。投票結果はわかりませんが、これでは最近我が団が取ってきた、多くのお客様が聴きたいと思い、また団員が演奏したいと思つてゐるような黴臭くない、より革新的で真に交響的な音楽を取り上げると言う路線を外れて、博物館的な音楽に逆戻りするのはどうしても納得できません。もう一度考え直して投票をやり直してもらえませんか」

「しかし、決選投票の前に意見を求めたとき、直ぐ投票に入ろうと言われたのは松本さんでしたよ」

「それは・・・スメタナならまだしも、まさかこんな古臭い曲が一位になろうとは思わなかったからですよ。皆さんもそうじゃないですか？」

「再投票も悪くないな」

と座ったままで声を出す者がいた。

「それじゃ今の投票はなんだったんですか？」

司会者がやや不機嫌な調子で言った。

実は、柏木自身もこの投票結果は意外だった。最近は管楽器群、打楽器群の勢力が、おとなしい弦楽器群の勢いを上回っている。投票直前の松本の独り言があまりにも嘲笑的な態度だったので、一時的に柏木に同情した者がいた結果が票数に出たのかもしれない。

「一位になった曲の提案者の柏木さんは、再投票に

ついてどう思われますか？」

司会者が聞いた。

「たしかにブラームスは僕が提案した曲ですが、一旦候補曲のひとつとなつたらもうそれは僕一人のものじゃないですからみんなが、再投票がいいのならそうしたらどうですか」

これが柏木の弱さであり、善良さでもあつた。

「柏木がいいのならそうしようや」

などの声が会場の二、三箇所から聞こえた。

「僕としては、釈然としませんが再投票にしまし
よう」

司会者の発声で決選投票はやり直された。たいした
根拠もなしに声の大きい者の意見で強引に結果が捻
じ曲げられることは、このオーケストラではこれま
でにもなくはない。

再投票の結果は、マーラー、ブラームス、スメタ

ナの順になつた。さすがにマーラーに手を上げた陣営からも歓声は上がらなかつたが、更なる再投票などを訴える発言もなく、マーラーの《交響曲第五番》がメイン曲に決定した。

サブ曲にはCDなどにも良くあるマーラーとモーツァルトの組み合わせが良いと思ひ込んでいる者が多いと見えて、サブ曲に上がっていたモーツァルトの《ピアノ協奏曲 第二十一番》が決まつた。マー

ラーが一時間以上と長いので、プログラムはこの二曲で、アンコールはその場の提案で、弦楽器だけでバッハの《アリア》に決まった。

柏木は、決まったプログラムとしては悪くないと思っただが、このところ大編成の曲が続いていて、特に弦楽器の多くの者が充分に弾けないままに圧倒的な音量の中で何となく演奏したような気になっている状態に、一度原点に戻りたいと思っただ提案だった

が、今年も受け入れなかったことで、少し気落ちしたのだった。

〔二〕

楽譜の準備、ピアニスト探し、練習計画と阿弥響は次の演奏会に向けて動き出した。その中で、マーラーは大変な難曲だからマーラーのときだけコンサ

トーマスターは専門家を頼もうと言う声が出てきた。コンサートマスターに選ばれたばかりの柏木の耳にもその噂は聞こえてきた。柏木は、自分が否定されたような寂しさを感じた。確かにプロの方が上手くやるに決まっている。しかしここはアマチュアのオーケストラなのだから自分でもいいじゃないかと思つた。まだ楽譜を確かめていないが自分だつてしつかり練習すればやれるはずだと思つた。

そうしたある日、団長が柏木のところに来て、マラーのコンサートマスターに地元のプロオーケストラの人を頼んだらどうかと言う声が出ているが、どうかと訊いた。柏木は、そのアイデアの出所を訊いた。団長は松本だと言う。案の定である。柏木は、「松本さんはどうしてもそうしたいと言われてるんですか？」

柏木には珍しく抵抗した。

「松本さんは、柏木さんは古典的な曲の演奏はとても上手いけど、マーラーのような後期ロマン派の弾き方には合わないと言っていました」

「団長はどう思うんですか？」

「僕は、それもありがたかな・・・と、いつもの柏木だったら、ここで

「皆さんがそう言うのなら・・・」
と譲るのだが、

「でも、僕はつい先日の総会でコンマスに決まっただばかりじゃないですか。松本さんはそれを承知の上で、マーラーを強力に推薦したのですよね。しかも再投票までさせて」

「柏木さんの気持ちはわかりますが、この難曲をよりよい仕上がりにするためには悪い案ではないと、僕も思うんですよね。モーツァルトの方はもちろん柏木さんでお願いするのですけど」

柏木は、すでに一部の者の間でその方針は決まっているような感じを受けた。

「わかりました」

柏木は了承したが、選曲会議での再投票、メイン曲でのコンサートマスター外しと続いて、大きな屈辱を感じた。もちろんそれらはオーケストラ全員の意向ではなく、一部の声の大きな者によることなのだ。このとき柏木には、このオーケストラが自分を

無視して突き進もうとしているように思ったのである。

〔三〕

柏木は、オーケストラのメンバーと弦楽四重奏を組んでいる。柏木と今年からセカンドバイオリンのトップになった三浦陽子で弦楽四重奏のファースト

バイオリンを交代で受け持ち、ビオラはトップではないがこのオーケストラでは一番上手い、経験豊かな出口博、チェロは年齢も経験も豊かな大藤圭一である。

大藤は四重奏の練習のとき主になって練習内容について発言していて、事実上の音楽的な中心人物である。柏木たちは、このメンバーでもう十二年間続けている。定期演奏会のようなものはやっていない

が、団内の年末行事であるアンサンブル大会には毎回出演している。彼らの演奏はアンサンブル大会の目玉の一つにもなっている。しかし、彼らは人前で弾くことを目的としないで、自分達が演奏したいと思う曲を自由に取り上げて、それを出来るだけ良い仕上がりになるまで練習をして、しかるべきときに仕上げの録音をすることになっているのだ。録音がすんだら、新しい曲を決めてまた練習を始めるのである。

る。四人は音楽以外でも仲がよく、優れた弦楽四重奏団の演奏会があると四人揃って聴きに行くこともある。また、録音をすませたときや年末などには食事会をしているし、たまには一泊のドライブや登山をしたこともある。そうすることでお互いの人間的な理解も深めている。

四重奏の練習の集まりでは、当然今回のオーケス

トラでの出来事が話題になった。四人ともオーケストラのメンバーなのだから当然である。

実は選曲会議の前に、柏木は自分のブラームスプロのアイデアを四重奏のみんなに話したことがある。みんなは、良い案だから選曲会議では賛成票を入れると言ってくれた。ただそのとき、柏木の案では、アンコールはブラームスの《ハンガリー舞曲》になつていたが、チエロの大藤の意見で、《大学祝典序曲》

に変更したのだった。もちろん四人とも選曲会議には出席して、柏木の案に票を入れた。だがこの案は通らなかつた。

このとき四重奏のメンバーは、マーラーのコンサートマスターは外部からプロを呼ぶと言うことをまだ知らなかつた。柏木がそのことを言うと、三人ともとんでもないことだと言つて憤慨した。

「それつてみんなに諮らないの？」

第二バイオリンの三浦が言った。

「どうするつもりだろうね」

柏木もはっきりは掴んでいない。

「そりゃ、みんなの了承を得るべきだろう」
ビオラの出口も憤慨した口調だ。

〔四〕

オーケストラの練習のとき三浦はコンサートマスター問題について団長に質した。団長は、

「どうしてそのこと知ってるの？」
と三浦に訊いた。

「柏木さんから聞きました。四重奏の練習のときに」
「まだ正式に決まったわけじゃないから、誰にも言わないように言つといたのに」

「正式に決めるとき、全員に諮るのですか？」

「決まったらね」

「決めるときには、そうしてもいいかどうかみんなには諮らないのですか？」

「そうすると言うことは、柏木君も了承したことだからそれで行くつもりですよ」

「そうなんですか。柏木さん、了承されてるんですか」

「彼、そう言ってなかった？」

「柏木さんがどう思っているのかは聞かなかつたけど」

「無責任なことを勝手に喋ってもらつたら困るんだよね」

そこに柏木が通りかかった。団長は、

「ちよつと、柏木君。この前のことまだ喋ってもらっちゃ困るって言ったでしょ」

「そうでした？そうしても良いかと訊かれたから、

良いですと言ったけど、喋るなどは聞いてませんよ」

「言っただけだよ」

「聞いてないよ。それとも僕が忘れたんかな。でもそんなに秘密にするようなことだったの？」

「秘密ってことはないけど、正式に決まってることだし」

結局この問題については、この日のオーケストラ

の練習中には何も説明はなく、一週間置いた次の練習日に発表された。団長からで、

「今度の演奏会では、マーラーのコンサートマスターは西南フィルの第一バイオリンを弾かれています。東郷先生にお願いすることになりました。モーツァルトのピアノのソロは、地元のビクトリア音楽大学の戸田清美先生に交渉しているところです」

柏木は東郷の名前を聞いて驚いた。西南フィルの

東郷に、柏木は一年前までレッスンを受けていたのだ。ちよつとした行き違いで決別するような形でレッスンを辞めた経緯がある。いったい誰がいつ交渉したのだらう。それに東郷なら柏木の技量を充分に知っているはずである。東郷のレッスンをやめるころ柏木はチャイコフスキーの《バイオリン協奏曲》を見てもらっていた。だから東郷が柏木にはマールーのコンサートマスターが出来ないと言うとは思え

なかつた。

だが、柏木に思い当たる節がないわけではなかつた。柏木は東郷のレッスンを辞めて間もなく、レッスンを受け始めた西南フィルのコンサートマスター前田のところへ、もし阿弥響でブラームスの『バイオリン協奏曲』をすることになったら、前田の弟子の中から推薦するような生徒がいるか聞いたことがある。そのとき高校三年の女の子で凄いのがいるか

ら、そのときは言つて来なさいと言われていた。柏木は、もしかしたらその話が同じオーケストラの中で東郷まで伝わって、柏木が自分のところを辞めて前田のレッスンを受けていることを知っただけでなく、バイオリンのソリストを前田の弟子に頼もうとしていることまで知つて、東郷は柏木に対して腹を立てているのかもしれない。

柏木は東郷がコンサートマスターとして弾きに来

るのだつたら、その隣で弾くことになるかもしれない。それはコンサートマスターを下ろされる以上に嫌なことだつた。

演奏を依頼する先生方については交渉ごとなので幹部などが当たつて、決まるまでは噂が広まらない方がいいが、コンサートマスターを外部に依頼するかどうかはオーケストラとしては重大なことである。誰にするかはともかくとして、その方針も事前に何

の相談も無く決定され、人選まで決まってしまうて
いるようなのである。

団長がこの発表をしたとき団員達は思わず柏木の方を見た。柏木の反応が気になったのだ。しかし柏木は何も言わず、外目には平然としているように見えた。それを見た団員達は、すでに新コンサートマスターの柏木には伝えられていることだったのだらうと想像した。しかし、チェロの大藤が手を上げて

発言した。

「私たちは今初めてコンサートマスターのことを聞きました、それは柏木君には了解を得ていたのですか。柏木君は先日総会で決まったばかりの新しいコンサートマスターですよね。彼の初めての演奏会がサブ的な立場になるわけですよね。もし来年別の人がコンサートマスターになったら、柏木君は本来の役を一度もしないコンサートマスターと言うこと

になりますよね。そこまで考えて決められたのですか？」

「柏木さんは来年以降もコンサートマスターをやつてもらふことになるでしょうから、そのような心配は要らないと思います」

「コンサートマスターも他の役員も、基本的に任期は一年のはずですよ。来年以降もするなんてわからないことですよ。それとも柏木君ではマーラーの

コンサートマスターは務まらないと言うことですか？」

「そうは思いませんが、難しい曲であることはご存知の通りで、より良い仕上がりのために考えたことなので、了解してもらいたいと思います」

難しい議論になってくると誰も口を出さなくなってしまう。団長とのやり取りだけでは埒が明かないと思つたのか、大藤は、

「皆さんはこのようなやり方を納得されているのですか。僕は柏木君の技量なら充分にマーラーのコンサートマスターが務まると思います。みんな選出されたばかりのコンサートマスターを蔑ろにするようなことはしない方がよいと思います。どう思われますか？」

みんな、大藤と視線が合わないようにしている。いつもバイオリンの一番後ろの方で弾いている阿弥

響最年長の竹内と言う男が立ち上がった。

「すでに先方をお願いしているようだから、いまさら断われないでしょう。だったら私のようにまともに弾けない人間からすれば、プロの方の間違いないリードがある方がありがたいですから、今回はこれでいったらどうですか？」

団員達の間から最長老の意見に頷くようなざわめきが起きた。しばらく沈黙が続いたが、ややあつて

団長が、

「いろいろご意見はあると思いますが、松本さんのご苦勞で東郷先生が折角引き受けてくださったのですから、今回はこれでお願ひします」と締めくくった。

松本からどのような経路で東郷に渡りがついたのかがすぐにわかった。ホルンの連中が大きな声で喋っているのが嫌でも柏木の耳に入ってきたのである。

ホルンだけでなくマーラーを推薦した連中は、希望の曲が逆転で決まったことを非常に喜んでゐる。そのホルンの一人が、得意げに喋つていたのだ。

「松本さんは本当に凄腕だよ。狙つたものは何があつても逃さないからね。西南フィルの飲み友達経由でバイオリンの先生まで射止めるのだから、顔の広さと手腕はたいしたものだよ」

松本が西南フィルのホルンの人にレッスンを受け

ていることを柏木は知っていた。そう言えば、東郷はレッスンの度に、前田はコンサートマスターとして無能だと悪口を、一レッスン生である柏木に言っていた。柏木自身はそのようなプロのオーケストラにありがちな仲間内の言動に惑わされなくて、迷わず東郷の次の先生としてかねてから尊敬していた前田を選んだのだった。

東郷の発言を聞くまでもなく、西南フィルには派

閥があつて、お互いに悪口を言い合っていることはよく聞くことで、団員は少し気を許した人にはそのような話をするものだ。柏木は、百人近い人間が常に一緒に仕事をしているオーケストラとはそんなものだと以前から思っていた。そして、仕事ではないが同様に大所帯の阿弥響にも厳然として派閥はある。今回のことは、その派閥の間で発生した出来事と言えるのである。

〔五〕

柏木は今回の一連の騒動で、このオーケストラで弾き続けるのが何となく嫌になってきた。柏木は、ブラームスの唯一やったことがない《交響曲第二番》も弾きたかったが、マーラーも良い曲だと思っっている。CDも何種類か持っているし、スコアも持っている。特に弦楽器とハープだけによるアダージエツ

トの楽章は素晴らしい。この曲が決まったとき柏木は、オーケストラの連中と雑談をしたことがある。

管の連中は、柏木を捕まえて、

「マーラーなんか聴くことないでしょう」

と言ったが、柏木は、

「とんでもない、アダージェットだけは度々聴いている」

と答えた。すると管の連中は、

「逆だね。俺達はアダージェットだけを飛ばして聴くからね」

と言っていた。

柏木は、管楽器をしている者と弦楽器をしている者とは、音楽に対する捉えどころが本質的に違うのだと思った。

それでも柏木は、曲が決まってからスコアを見ながら第一バイオリンのパートを全曲弾いてみた。難

しくてかなりさらわなくてはならないところも少なくなかったが、練習さえすれば何とかなれると思った。ただこのオーケストラでは、アマチュアであることを差し引いても満足できる出来にはならないだろうと思った。まあこの際東郷先生のご指導を仰ぐのも悪くないだろうと考えることにした。

四重奏の練習に集まったとき、大藤が愚痴を言っ

た。

「折角切っ掛けを作ろうと思つて議論を吹っかけたのに、柏木君も出口さんも三浦さんも何も言わないのだから」

ビオラの出口が、言い訳のように言つた。

「すまん、すまん。でもあの人たちは一度言い出したら後に退かないからね。それに竹内老が言うように、頼んでしまった先生は断われんしね」

「そこがやつらの手口なんだよ」

と大藤が悔しそうに言う。

「それにしても強引な人たちね。前もって柏木さんの了解を得たって言ってらしたけど、本当にそうだったの？」

「どうかって言われたけど。もう決まっているみたいな感じだったから」

「そこが柏木君の人の善いところなんだよね。人は

考えがあつて何かをするのだから、よつぽどのことがないと思意見を尊重すべきだといつても言つてるものね」

「まあ、その役員達を選んだのも僕たちだからね」
「考えてみると、柏木さん気の毒よね。プロが来るつて言うのだから、自分の方がちやんとやるとは言えないだらうし」

「東郷さんが来ると言つても、どれくらいの回数来

るのか知らないけど、いつも西南フィルのトラは本番前一、二回だよ」

「でもコンサートマスターだからそんなことはないだろう」

「東郷さんが来ないときは柏木さんが、コンサートマスターとして練習は弾くことになるのね」

「それじゃ結局柏木さんが毎回ずっとやって、最後にチヨロツと来て、自分が指導してきたみたいな顔

して東郷さんがコンサートマスターの席に座るわけ
ね」

「だから僕は、東郷さんより柏木君の方が上手いとは
言わないけど、チヨロツと来ただけの東郷さんよ
りも毎回やる柏木君の方がみんなも信頼できると思
うんだよ。僕達はアマチュアなんだから、それが一
番いいに決まってるんだよ」

「もう決まったことだから、あとは出来るだけたく

さん来てもらおうことだね」

〔六〕

このようにして阿弥響のマーラーの《交響曲第五番》の新しい一年が始まった。四重奏のときにみんなが予想していたとおり、毎回の練習は柏木が勤めた。そのことを見て、東郷を呼ぶことを決めた連中

は、コンサートマスターとしての柏木を蔑ろになんかしてないだろうと言った。弦はもちろん、管のみんなもまともどころか、音も出せないような段階から、柏木だけはほとんどの箇所を弾いていた。弦のみんなは柏木の音を頼りに手探りしながら、少しずつ弾ける箇所を増やしていくのだった。しかしこの曲は長い。それだけに弾けない箇所も多い。譜面のどのページをめくっても弾けない箇所がいくつも

出てくる。演奏者だけでなくトレーナーも大変であった。若い団員の渡部というトレーナーはものすごく勉強をして、みんなの前に立ったときには全曲のすべての場所を把握しているようだった。それはテンポの変化が激しいこの曲を的確に指揮したことからわかる。マーラー練習の第一段階での功労者は、間違いなくこのトレーナーの渡部とコンサートマスターの柏木だった。

実はこの時期にまだ本番指揮者は決まっていなかった。毎年比較的アマチュアに理解のある指揮者を選んで呼んでいるのだが、いまのところスケジューリング的に都合がつく人が見つからないのだ。もしかしたら、阿弥響でマーラーの《交響曲第五番》をすると思っていて、結果に責任が持てないと思つて引き受けないのではないかと思えるほど、頼む人がことごとく辞退したのだった。団員の間では、団員トレーナー

ーの渡部が本番も振ればいいと言う声が出始めていた。それと同時にコンサートマスターも柏木でよかったじゃないかと言う声も囁かれ始めていた。

東郷は阿弥響の夏の合宿に初めて登場した。柏木は東郷の隣で弾いた。東郷は、レッスンを辞めたことなどについては柏木に何も言わなかったし、二人はほとんど話をしなかった。そのころオーケストラ

では、まだ弦も管も難しいところはほとんど征服で
きていなかっただが、テンポの変化や、出については
渡部と柏木のリードでかなり出来るようになってい
た。

東郷はさすがに大きな仕草で出を待っているパー
トに合図した。それは管のあるパートに対してでも
同じようにした。テンポの変化も渡部の指揮どおり
にみんなにもよくわかるように弾いた。音もしつか

りしているので、着いてくる者にとっては弾きやすい。しかしそれらは柏木がしてきたことよりも格段に優れていると言うほどではなかった。柏木も似たようなことをしていたのである。だから柏木のやっしてきたことで充分であるとも言えるのだった。柏木を支持している者たちは、松本たちがこのことをどう受け止めているのか興味があつた。

しかし、合宿のあと柏木は団長から思わぬことを

言われた。東郷から、自分がコンサートマスターを
するときには、柏木は隣に座らないように配置して
欲しいと言われたと言うのだ。その代わりに東郷の
後ろで弾いていた女性を自分の横に座らせて欲しい
とも言っているらしい。団長は、東郷をマーラーの
コンサートマスターとして依頼した以上言う通りに
しないと仕方がないと言うのである。さすがに団長
も柏木にすまないと言う態度であつた。柏木にとつ

ては、またしても屈辱的な話だった。東郷が自分の横に座らせて欲しいと言ったのは吉野と言う、入団して二年目の若い女性で、確かにオーケストラの中では上手い方で、だから前から二番目で弾いていたわけだが、コンサートマスターに推挙された柏木とは格段の差がある。柏木は、ムツとした気持ちを落ち着かせてから団長にその理由を聞いた。

「東郷さんはどうい理由でそのようなことを言わ

れたのですか？」

「東郷さんが言うには、柏木さんは確かに良く弾かれるが、独特の癖があつて隣で弾かれると邪魔になることがある。東郷さんは教えたことがあるので柏木さんの癖についてよく知っているそうなんだ。その点すっかり弾けて、しかも変な癖がない吉野さんの方が有難いのだそうだ」

柏木は吉野について、確かに指は良く回る、つま

り早い所も弾けるけれど、どちらかと言うと棒弾きで音楽的ニュアンスはまだまだだであると思つている。指が速く回るバイオリニストも決して多くはないこのオーケストラでは貴重な戦力であることは確かだが、コンサートマスターのアシスタントの位置で弾く人ではないと思う。東郷がそんなこともわからないとは信じられない。柏木は、ただ若くて可愛い女性であれば少々音楽性に欠けていても構わないと

思っているのかと、邪推したくなつてしまふのだつた。

それだけでなく東郷の指示は、自分が来ないときのコンサートマスター代理は、柏木ではなく、山田にするようにとも言つたそうだ。山田は、総会でコンサートマスターを選挙するとき三番手だった、柏木よりもずっと若い男だ。実は、山田は現在東郷のレッスンを受けている。

それ以後、阿弥響の東郷のいないときのマーラーの練習は、山田と吉野が一番前に座って行なわれるようになった。山田もそれなりに阿弥響の中では弾ける方であるが、マーラーについては柏木ほどの使命感を持って取り組んでいなかっただので、トレーナーの指示に着いていけないところが随所に出て、そのたびにオーケストラ全体を混乱に陥れた。柏木が代理を務めていたときには無かつたことである。

この状況について陰で不満を言う声はあつたが、表立って疑義を唱える者は現れなかつた。東郷に辞めてもらう以外に、この扱れた状況を元に戻す方法がないことをみんな悟っていたからである。演奏会まであと半年あつたが、長大なマーラーの《交響曲第五番》の練習は時間がかかる。一回の練習に五つある楽章の二つくらいずつしか出来ない。しかも二つの楽章を練習しても、それが纏まっていくなると言う

実感はなかつた。おまけにもつと後でも良いと思われるピアノ協奏曲のソロとの合わせを出来るだけ早く、それもなるべく回数多くやって欲しいと、ソリストを引き受けた戸田清美が希望したのである。

トレーナーの渡部は少し焦りを感じ始めた。まだ本番に呼ぶ指揮者は決まっていなかつたし、山田のコンサートマスターでは練習の効率が非常に悪いのだ。

この状況を問題視した渡部の提案で緊急の役員会が開かれた。本来このような技術的な問題のときはコンサートマスター、つまり柏木も出席するのが普通であつたが、今回はややこしいコンサートマスターの状況なので、柏木は役員会への出席を遠慮してくれと言うことになつた。もちろん山田も出席はしなかつた。ホルンの松本はある役員だつたので出席した。

役員会では、トレーナーの渡部から、東郷がいな
いときのコンサートマスター代理を柏木に戻して欲
しいと言うことと本番指揮者を早く決めて欲しいと
言う提案がなされた。前段の問題については、東郷
に了解してもらおう交渉を松本がするように求められ
た。しかし松本は、自分としては直接東郷と親しい
わけではないので、レッスンを受けている山田を交
渉役にしたらどうかと主張した。つまり山田自身が

東郷に、自分ではなく柏木にコンサートマスター代理を戻すように交渉しろと言うわけである。

渡部は、ついでに東郷が練習に来たときのトップサイドも柏木に戻して欲しいと言いつ出した。結局それも山田に交渉してもらおうと言うことになった。山田本人のいない場での決め事で、山田にとっては重い役割であることは誰にもわかっての上でのことだった。

指揮者については渡部が本番も振れば良いと言う意見が多かったが、渡部は荷が重すぎると言つて固辞したまままで役員会はお開きとなつた。

団長は山田に、役員会で話し合われた内容を説明し、東郷に会つたときにそれらの要望事項を認めてもらうように交渉するよう頼んだ。しかし山田は、そんなことは出来ないと言つて辞退した。どうしてもと言

うのなら団長も一緒に行つてくれと言う。団長は責任上、そうすることにした。

〔七〕

山田と団長は、山田のレッスンがある日に東郷の自宅を訪れた。東郷は、初め何の話でしようと機嫌よく応対していたが、団長が本題に入ると見る見る

不機嫌さをあらわにして、そんな話なら自分を辞めさせてから好きなようにすればいいと大声を出した。そして、そんな詰まらん話だったらレッスンの時間がもったいないから終わりにしてくれと、団長を追い返したのだった。このけんもほろろの東郷の対応に、そのあとレッスンを受ける山田を、団長は同情したほどだった。

翌日団長は山田と会って、あの後どうなったのか

聞いた。山田が言うには、東郷はこれから山田にマ
ーラーのコンサートマスター代理としてのレッスンを、責任を持って行なう。また吉野は自分がいないときは山田のとなりで弾き、自分が行ったときは山田が隣に座れと言うことだった。柏木の復活については一切言及しなかつたそうだ。

この成り行きは、山田にとつても辛いことだった。たまたま東郷の生徒と言うことで交渉に当たられ

たが、もとをただせばトレーナーや役員達の信頼を自分は得ていないと言うことを知らされたことになるのである。そして柏木の方が適任だとみんな思っていることになる。そんな中で、いくら東郷が責任を持ってコンサートマスターとしての指導をしようと、言っても、柏木の實力を知っている山田にとって一番前で引き続けるのは辛いことである。

このもつれた状態をどうやって解決したらいいの

か団長も悩んだ。

「辞めさせてから」

と言われても、そんなことは、

「はい、そうですか」

と言うわけにはいかない。

それから間もなくだった。山田がオーケストラを退団すると言いだしたのは。自分は責任を果たせな

いし、このごたごたにかかわるのは嫌だからと言う。団長はじめ柏木もそんなことは気にかけていいから辞めたりするなどと説得したが、山田は練習に出て来なくなつた。東郷の了承はなかつたが、止むを得ず柏木がコンサートマスター代理を務めた。

年明けの練習に東郷が来た。その日柏木はたまたま会社の出張があつて練習を欠席していた。山田も

あれからずつと練習には出て来ていない。東郷は団長に山田は具合でも悪いのかと聞いた。都合でレッスンを休むと電話してきたきりレッスンにも行っていないらしい。団長は、山田は一身上の都合でオーケストラを辞めたことを伝えた。このとき東郷は今回の自分のいろいろな指示で山田の立場が辛いものになったことを悟ったようだった。

ちようどその同じころ出張帰りの新幹線の中で、

柏木はある決心をしようとしていた。

阿弥響には長く在籍していろいろな曲を楽しんできたが、ここ数年は本当に弾きたい曲をする機会がない。おまけに今度のごたごたである。東郷をコンサートマスターとして呼ぶことを提唱した松本は、責任を感じて東郷と話し合うべきなのに、それをしようとしなない。その結果山田を辞めざるを得ないようなどころに追いやった。柏木はそのようなオーケ

ストラを辞めて、室内楽を楽しむことに専念したい
と思います。

いまやっている弦楽四重奏はお互いの人間関係も
良く、本当にやりたい音楽ができていようと思う。
自分が辞めたとしても、四重奏の三人を引き連れて
辞める必要はない。それぞれの考えもあるのだから、
他の三人はオーケストラを続けたままで、四重奏を
すればいい。新幹線が下車駅に着いて、立ち上がっ

たとき柏木の決心は固まった。

柏木は急遽四重奏のメンバーに練習会を呼びかけて、自分が阿弥響を辞めることを伝えた。すぐには誰も声を出さなかつた。四重奏の練習に集まった四人は事実上阿弥響の弦パートを支えている四人である。その先頭にいるのが柏木である。たとえ今回のことでコンサートマスターを下ろされたと言つても、

柏木が弦パートの中心であることは変らない。

「もう決めたことなのか？」

大藤が静かに言った。柏木は黙っていた。みんなは柏木の意味が固いと思った。この間の経緯を知っているみんなにとつては、柏木がよくここまで耐えてきたと思うのである。

「四重奏はこれまで通りよね」

三浦が言った。

「皆さんさえよければ、是非そうさせてもらいたいと思つてゐる。音楽で食つてゐるわけじゃないから、嫌な思いまでして続けたくないからね。ここなら僕
のやりたい音楽が出来るような気がしてゐるんだ。
もし皆さんが嫌でなかつたらこれまで通り続けた
い」

「よかつた。みんな良いわよね」

「もちろん。この四重奏を辞める必要なんて全然な

いよ」

「これまで以上に内容濃くやろうよ」

四人の意思は一致した。

〔八〕

柏木はその夜団長に電話で自分の意思を伝え、次のオーケストラの練習に出席して、みんなに挨拶す

るつもりであることを伝えた。団長は柏木に辞められたら困ると言つて、強く翻意を求めたので長い電話になつたが、柏木の意味は変わらず、団長もしぶしぶ電話を切つた。

その夜すでに遅い時間だったが、団長はトレナーの渡部に電話して、今後のことを話し合つた。結局今となつては東郷をコンサートマスターとして、マーラーだけでなくモーツァルトもやってもらい、

東郷の来ない練習では、コンサートマスターの二番目の候補になつていたベテランの女性に代理を務めてもらふことを話し合つた。

柏木は電話で言つたとおりに、練習日に出かけて行って、みんなの前で挨拶して区切りをつけた。柏木は、ただ考えるところがあつて退団すると言つて、ごたごたと理由を並べたりしなかつた。団員達はこの間の経緯を知つていたので、特に何かいう者

はいなかつた。

マーラーの本番が一月後に迫つた。本番の指揮は渡部がすることに正式に決まっていた。渡部はその可能性が高まつてから、本格的に指揮の勉強を始めていた。西南フィルの常任指揮者にレッスンを受けるために東京まで出かけたりもした。それは阿弥響にとつても、渡部本人にとつても好ましいことだつ

たが、またしても東郷関連の問題が発生したのである。

東郷は、突然西南フィルを辞めて東京のあるオーケストラに移ることになったのである。しかし今になつて阿弥響のコンサートマスターを投げ出すわけにいかないから、出来るだけ練習には東京から来たいので、迷惑をかけて申し訳ないのだが旅費と宿泊費はお願いしたいと言つてきた。

阿弥響としてはもうこの段階になつてはそれも致し方ないと考えたが、東郷ができるだけ来たいと言う回数には本番までに三回くらいだと言うのだ。これまでも合宿のほか年明けに一回来ただけである。言いたいことだけは言っておいてオーケストラの中をがたがたにしておいて行つてやるから旅費を出せとは何ごとかと、団長は憤りを感じた。それで、また東郷に怒鳴られるのを覚悟で当の本人に、西南フィ

ルで東郷の代わりにコンサートマスターをしてもら
える人を紹介してもらえないかと頼んだ。東郷の返
事は、西南フィルは阿弥響の本番の日演奏会が入っ
ていて、自分は有給をとって阿弥響に行くつもりだ
ったが、他の者にそんなことを頼むことは出来ない
と言った。団長は、旅費、宿泊費などを出すかどう
か独断で決められないので、相談してから返事する
と言つて電話を切った。

団長は、このとき一つの可能性に賭けてみようと思つたのだつた。東郷との電話の後直ぐに柏木に電話して、東郷が東京のオーケストラに移るので、もう一度コンサートマスターに、今度は本番も演奏するコンサートマスターとして戻ってくれないかと頼んだのである。もし柏木が引き受けたら、東郷を団長の決定として断わろうと決心したのである。

柏木は即答しなかつた。即座に拒否しなかつただ

けなのか、考慮すると言う意味なのか団長は判断し
かねた。同じ夜、柏木は渡部からも団長と同じ趣旨
の電話を受けた。渡部はこれまでのごたごたはすべ
て水に流して、阿弥響の本来の姿に戻って一緒にや
ろうと、団長よりはフレンドリーな言葉で復帰を誘
ってきた。柏木は渡部に対しても団長に対するのと
同じように即答しなかった。

柏木は迷った。人生何ごとも誘われるうちが華で

ある。誘いを断わっているうちに誰も誘ってくれなくなる。そのうち自分が誰かを誘っても、他人も応じてくれなくなるだろう。四重奏はこれまで通りしつかりやっついていこうと約束したばかりだ。オーケストラ全員の前できちんと退団の挨拶もした。そのオーケストラの方は、自分から復帰を願い出たのではなく、オーケストラの方が自分を必要としている。柏木は、音楽活動を四重奏一本に絞って本当に充実

した音楽生活が出来るのだろうかと言ふことも、確信があるわけでもない。

「これまで以上に内容濃くやろう」

と誓い合つたが、リーダー格は自分と思つていいのだらうか。チェロの大藤が四重奏の音楽的な内容について発言することは多い。ビオラの出口も経験豊かなアマチュアで示唆に富んだ発言をする。三浦も柏木たちの四重奏で経験を積んできた。自分が中心

だとは限らない。

これまでの四重奏の練習を振り返つても、意見が合わない場面はたびたびあつたし、議論してもすつきりした解決をしたとは思えないことの方が多かつたような気がする。これまで以上に自分が勉強し、練習をしてもみんなを納得させるだけの信頼を得られるだろうか。自分の熱意ばかりが空回りしたりしないだろうか。自分以外の三人にはオーケストラが

あるが、柏木にはそれが無い。今が、彼らと同じ立場に戻る最後のチャンスなのである。明日中には団長と渡部に返事しなければならぬだろう。柏木は眠れぬ夜を過ごした。

翌日の夜、柏木は団長と渡部に電話をして、オーケストラには戻らないことを伝えた。二人は残念がってさらに説得を試みたが、柏木の決心は変らなかつた。柏木の返事を聞いた団長と渡部は、東郷の要

求どおり旅費と宿泊費を出して、東京から来てもらうことに決めた。今回は指揮者を東京から呼ばずに渡部が本番を振ることになっているので、予算的には充分に可能なことを、団長は初めからわかっていたのだが、柏木の復帰の可能性を確かめる時間を稼いだのだった。

〔九〕

そして、阿弥響の本番は行なわれた。柏木も聴きに行つた。モーツァルトの《ピアノ協奏曲 第二十一番》は、ソリストの戸田清美が清楚な音で見事なモーツァルトを聴かせた。オーケストラもそれに答える良い演奏をしたと柏木は思った。コンサートマスターに東郷が座つたこともマエナスではなかつた

ようだ。

問題のマーラーの《交響曲第五番》はさすがにアマチュアにとつては難曲中の難曲であつた。第一バイオリンの前の方からはそれらしい音も聞こえてきたが、管楽器も含めて全体的にあまりにも乱れの多い演奏であつた。それはこれまでに取り組んだ、それなりに難曲と言えるシヨスタコーヴィチ、ラフマニノフ、ストラビンスキーの比ではなかつた。今回

のマーラーが過去に取り組んだ大曲などよりも格段に難しかったと言うことではなく、コンサートマス
ター不在のような状態の練習ばかりを重ねてきたこ
とが原因していると柏木は思った。四重奏の仲間達
も四苦八苦していることが客席から見ているとよくわ
かった。悪いことに、アンコールで弾いたバッハの
《アリア》まで、マーラーの混迷を引きずったよう
な出来だった。本来ここでマーラーが如何なる出来

であつても、弦楽器だけの澄み切つた音楽ですべてを洗い流そうと言うのが狙いだったのだらうが、何故かマーラーから続いているような濁つた音のままで弦楽器群は演奏したのだった。

このような柏木の感想は、次の四重奏に集まつたときの舞台に乗つた三人の感想と一致していた。大藤などは、

「阿弥響史上最悪の定期演奏会だった」

と言ったほどである。

「こんなことだったら柏木さんが言っていたブラームスプロの方がずっと良かったよね。きつと」

三浦が言ったが、柏木は、

「今さら言っても仕方がないよ」と言った。しかし三浦はさらに、

「ブラームスの《交響曲第三番》も難しいって聞いているけど、仮に今回のマーラーと難しさが同じだ

としても、何しろ長さが半分だからね。オーケストラの練習で倍合わせられるわけじゃないですか」

「だから言ってもしょうがないでしょ」

「実はね、打上げで来年は、今年投票で一番になったのに何故か再投票になったあの幻のブラームスプロをやろうよと言う声があったのよ。柏木さん復帰しなさいよ」

三浦は熱っぽく言ったが、柏木は何も言わなかった。

〔十〕

四重奏の練習は、柏木以外の三人がオーケストラの練習でマーラーと格闘している期間休みとなつていた。その間柏木は四重奏の次の練習曲と決まつていたモーツァルトの《不協和音》の自分のパートの練習と研究に没頭していた。《不協和音》と言うのは、音楽用語でよく響きあう和音に対して、響きあわな

い和音のことで、近代、現代の音楽ではふんだんに使われるが、モーツァルトの時代はもちろん、それ以降もかなり特殊な効果を狙う場合にしか使われなかつた。聴衆もそのような響きには慣れていなかつたので、それが出てくると敏感に聴き分けていたと思われる。そういう音をモーツァルトが『不協和音』の第一楽章のゆっくりとした序奏の部分で意識的に使つたので、この名前で呼ばれるようになった。その

《不協和音》はモーツァルトのみならず、古今の弦楽四重奏曲のなかでも選りすぐりの名作とされているものだ。

柏木はこの曲をこれまでにならない良い仕上がりにしたいと考え、他の三人が忙しい期間に、一人熱心に取り組んだのである。自分の練習だけでなく、曲をどのように仕上げていくかについても、たくさん持っているこの曲のCDの中から気に入ったものを何

枚か聴きながら、彼らがどのように弾いているのかを細かく楽譜に書き込んでいった。極端に言えば一音ずつ音の強弱、音色、長さをどうしているのか、注意深く何度も聴き返した。さらにメロディの繊細な抑揚を聴き取りながらスコアに書き込んで行つた。もちろんモーツァルト自身が大まかな指示を楽譜に書き込んでいるが、それは柏木が書き込んだような詳しいものではない。演奏者への指示は、モーツァ

ルトの時代にはごく大雑把なもので、実際の演奏に当たっては演奏者の音楽性に任せられていたり、その時代の常識となつてゐる流儀に従つて演奏されていたりしたのである。時代が進むに従つて作曲者は演奏者に細かい指示を書き込んで、自分の思い描いた通りに演奏してもらふことを望むようになるのである。《不協和音》にしても、時代とともに演奏スタイルは変化しているし、演奏団体によつてももちろ

ん異なる。だから柏木は、エマーソンカルテットの演奏を参考にするに相応しいと考えて、彼らの演奏を中心に勉強したのだった。もちろんエマーソン以外の四重奏団の演奏を最高だと思ふ者もいるだろう。しかし柏木は、少なくともエマーソンの演奏がつまらないと言う者はいないだろうと思つていた。

柏木は、《不協和音》の四つの楽章すべてにわたつて、その作業を行い、スコアに全部書き込んだ。そ

してそれを三部コピーした。もちろん四重奏の三人に渡すためである。

《不協和音》の練習を始めるとき柏木は、

「今回《不協和音》をどのように仕上げるか考えたので、それをスコアに書き込んでみたから、みんなも参考にして欲しい」

と言って、スコアのコピーを渡した。二十ページに

も及ぶホツチキス止めされたスコアを渡された三人は、このメンバーで四重奏を続けてきて初めてのことだったので、多少戸惑いながらそれぞれピラピラとめくった。チエロの大藤が、

「よく研究してるなあ、こういう風にして四人が共通のイメージを持って曲を仕上げていくのは、確かにいいかもしれないね。ここに書き込んであるの柏木君の考えだよな？」

「そうだけど」

柏木は、大藤が何か言いたそうなのを感じて、彼の次の言葉を待った。

「でも、これまでは実際に練習しながらみんなで自由に感じたことを言い合いながら音楽を作ってきたよね。誰か一人の考えに従うって言うのは室内楽の楽しみ方からするとちよつとどうかね」

柏木は、この書き込みをしているときにも大藤が

そのような意見を言いだしそうだと思わなかったわけではない。大藤は、四重奏の練習では自分の曲に対するイメージを常に持っていて、それをみんなに「そうするものだ」と言うようにしてきたのだ。だから自分以外の者の意見に従うのには抵抗があるはずである。

四人の中で最も室内楽の経験が長く、たくさんの曲を知っているビオラの出口が口を開いた。柏木は

大藤と似たようなことを言われそうだと思わず身構えた。

「大藤さんの言われるのもわかるけど、このスコアの書き込み、柏木君が自分の考えだけで作ったんじゃないなくて、何かモデルにした演奏があるのじゃないの？」

出口にして見ると、普段の練習で曲想について一番発言するのは大藤で、大概は納得のできるものだ

が、すべてが納得できるとは思っていない。他人から何も言われなくても音楽的に弾く柏木は、あまりみんなにああしろこうしろと注文することはしない。出口、大藤ともに年齢的にかなり先輩であるためもある。

「ええ、主に参考にしたのはエマーソンカルテットのビデオだけど、僕は《不協和音》のCDもビデオも何種類か持っているけど、その中でエマーソンの

演奏が一番気に入っているし、納得できるところが多いから」

「それはCD、それともビデオ？」
と出口が聞いた。

「うん、だからビデオ」

「もしかしたら、エマーソンの来日公演で、ハイド
ンセット全曲をやったときのやつ？」

「さすがですね」

「あれは僕もいい演奏だと思ふよ。どつちがファーストだったつけ？」

出口が言っているのは、エマーソン・カルテットは、柏木たちと同じようにファーストバイオリンとセカンドバイオリンが、曲によつて交代するシステムを取っているからだ。

「ドラツガーじゃない方、あの太つた方」

「フィリップ・セツツアー」

「そうそう」

「ああいう良い演奏をモデルにしながら勉強するのはいいと思うよ。エマーソンの演奏は確かに生き生きして退屈しないものね」

出口が柏木の取り組みに肯定的だったので柏木は安心した。ところが大藤は、

「確かに僕らの演奏に比べたらはるかに立派な演奏であることは間違いないと思うけど、僕らのような

者がカルテットをする楽しみは、自分たちの感覚で音楽作りすることじゃないの？」

それまで黙っていた三浦が言った。

「大藤さん、以前誰かのレッスン受けようっておっしゃって、一回西南フィルのコンサートマスターの誰さんだったっけ、レッスン受けたじゃない。エマーソンの演奏をモデルにして音楽作りするのも同じじゃない？あのレッスンのときも随分先生の好みを

言われたじゃないですか」

「前田さんでしょ。三浦さんが言うとおりでよ。あのときも結局僕らがやりたいことを手助けするだけじゃなくて、先生が自分のイメージを押し付ける格好になったじゃないですか。やっぱ僕たちが《不協和音》が素晴らしい曲と言うことを知っていて、それをやろうと決めただけでしょ。素晴らしいと思っただと言うことは、すなわち僕たちに《不協和音》

の素晴らしいイメージがあるって言うことじゃないですか。それを練習で追い求めていけばいいじゃないですか」

大藤の言うことにも一理ある。柏木は自分が勢い込んでやろうとしていることは、モデルが例え世界的なエマーソンカルテットの演奏であつても、それは自分達の独自の発想とは言えない。言わば物まねに過ぎない。柏木は拍子抜けした感じで言つた。

「物まねに過ぎないと言うことだね？」

「絵の勉強でも模写つてあるじゃないですか。確固たる独自のものが無い段階の者は、すぐれた作品の模写をして勉強するつてあるんじゃないですか？」と三浦が言うと、出口も、

「確かに僕らの仕上っている演奏は内容が幼稚だったり、通り一遍で退屈だったりするよね。何か変化をつけたつもりでも、実際には変化つけたように聞

こえなかつたり」

「それだったら、エマーソンの真似をして音楽作りしても、エマーソンのようにはならないのじやない？ だいたい彼らとは持っている技術が天と地じやないですか。とにかく僕は人真似は反対だね」

大藤は言い切った。大藤は、何か議論になるとだんだん言うことが極端になつていく傾向がある。柏木も、人真似が良いとは思っていないのだが、現在

の自分達の仕上げた演奏があまりにもパツとしないので、対策を打ちたかつたのである。その裏には、いつも練習はほとんど大藤が注文をつけながら進み、その結果に満足できないのは大藤の感性が必ずしも素晴らしい音楽を作り上げるものではないと言う思いもあるのである。でも、それをここで言うのはま
ずい。

「皆さんの意見はわかつたけど、折角柏木さんが作

つてきたものを教科書と思つて、一度弾いてみましようよ」

三浦がそう言うと、出口も賛成した。大藤もしぶしぶだが了承した。柏木は、初めはこれを見てみんなが喜ぶと思つていたのだが、そうでなかつたので気落ちしていたが、折角やってみようと言うことになつたので、

「上手く行つたかどうか確認しながらできるように

録音機を持ってきたから、ちよつと待つて」

と言いながら、楽譜や譜面台やら何もかも入れ込んである大きな手提げから小さなスピーカーセット、録音機、延長コードなどを引っ張り出した。柏木が録音の準備をしている間、他の三人は柏木から手渡された譜面を弾いてみたりしている。準備が出来たとき柏木は、

「本当は僕が書き込んだことを自分のパート譜に書

き写してもらいたいのだけど、いまはスコアのまま
で弾いて見ましよう。楽譜が小さいし、ページめく
りが直ぐ来てしまうので、続けて演奏できないけど、
とりあえず見開きの部分だけでも弾いて、録音して
みましよう」

大藤は黙って柏木がエマーソンカルテットの演奏
を聴きながら書き込んだことに従いながら試し弾き
していたが、

「確かに小節と言うか、ほとんどすべての音に何らかの書き込みがあるね。これは柏木君の労作だね。もしかしたら彼らはいちいち申し合わせながらこれをやっているのじゃなくて、身についている音楽性でやっているのかもしれないなあ。そうだとしたらやっぱり仕上がりは僕らのとは違はずだよね」

と言つて、四分音符が六つ並んでいるところを、初めの三つをだんだん大きく、後の三つを逆にだんだ

ん小さく弾いてみて、

「こうか」

と独り言を言った。それを聞いて出口が、

「しかもそれは、同じ形でも場所によつて抑揚の大きさはさまざまに出来るわけだよね。時には抑揚をつけないところもあるみたいだね、柏木君の書き込みを見ると」

「早くやってみましようよ。なんか面白そうな気が

してきたわ。いまのそれどころか？」
と言ったのは三浦だ。

「第三楽章の最初だよ」

大藤以外の三人も第三楽章のはじめを開いて、楽器を構えた。ファーストバイオリンの柏木が八分音符の山なりのメロディをフォルテで弾いた。柏木はそのメロディに自分が書き込んだクレッシェンドとディクレッシェンドの記号、つまり演奏者達が松葉

と言っている、二本組みの松の葉が横向きにして開く向きと、閉じる向きに向かい合うように置いた形の記号に従って真ん中を膨らませるように弾いた。それに続いて柏木も含めて全員で四分音符七拍をピアノで弾く。大藤が弾いたのはこの部分である。ここにも柏木は最初に自分が弾いたのと同じ松葉が開く記号と閉じる記号を書き込んでいる。だが今度は作曲者によってピアノと指定された中での抑揚であ

る。四人とも柏木の書き込みのように七つの四分音符の真ん中あたりを控えめに膨らませて弾いた。四人が揃って同じ抑揚をつけると、弾いている者には何ともいえない快感がある。一体感によるものかもしれない。一拍全員に四分休符があつて、今度はフォルテの八分音符でジグザグの階段を登るような激しいフレーズが来る。ビオラまでの三人は同じメロディ、つまりユニゾンで動く。ビオラと同じと言う

ことは、バイオリンにとつては低い音域である。チエロはさらに一オクターブ下の同じ音である。だからこの箇所は全員が低い音域を使ってフォルテで弾くので迫力がある。しかも柏木はこの登っていく音形にも開く松葉の記号を書いている。ジグザグの音形を一小節登り詰めたあと四分音符に落ち着く。この四分音符に『音を保つて』と言うテヌート記号を柏木が書いている。みんなはそれに従って先ほどの

四分音符が七拍続くときよりも、同じ四分音符でも長めに、しかもフォルテを保って弾いた。一拍全員が休んで今度はファーストバイオリン一人がジグザグに登る音形をピアノで弾く。そして上り詰めたところから半音階的に下りると、跳躍した低いフォルテの四分音符に落ち込む。実はこの落ち込んだ強く低い四分音符は新しい四分音符によるフレーズの始まりで、低い一拍のあと一オクターブ以上高いとこ

ろで半音上がりの二つの四分音符につながる三拍の音形で、これを三小節続ける。三小節目の高い音はこの楽章が始まって最も高い音になる。そして行くところまで行き着いたと言うように非常に低く長い音に落ち着く。低く長い音を一小節伸ばした後ファーストバイオリンはわきあがるようにピアノの八分音符で駆け上がり、高いところで山形の音形を一小節弾いて落ち着く。少し戻るが、柏木が低い音と高

い半音上がりの四分音符の音形をフォルテで弾いて
いるとき、まずセカンドバイオリン、続いてビオラ、
さらにチェロとそれぞれ一小節ずつ、半音階の八分
音符をフォルテで弾くのである。そしてファースト
バイオリンが低く長い音に落ち込むとき、同時に同
じ長さの低く長い音を弾く。ここで緊張感のある強
い和音が響き渡るのである。三人が一小節ずつ半音
階を弾くとき、それぞれは次に半音階で入ってくる

パートがフォルテで弾き始めるのを誘うように開いた松葉の記号、つまりクレツシエンドを柏木は書き込んでいる。この部分も作曲者は各自の半音階の始まりにフォルテと書いているだけで、その半音階の一小節間を、弾きはじめと同じ音量を保つのか、真ん中を膨らませるのか、小さくしていくのかなどどのように弾くのかは指示してない。それは演奏者に任されていて、それぞれの演奏者が自分達の感性と

考えて決めるのである。だからエマーソンカルテツトは柏木が書き込んだようにそれぞれクレツシエンドしながら弾いているが、どの楽団もそのように弾くとは限らない。ただ作曲者モーツァルトが書いたと思われる記号は守られることが普通である。

『モーツァルトが書いたと思われる』

と言ったのは、二百年以上前の楽譜や、その後の出版の事情は正確にわからないところも多く、ある記

号が本当に作曲者が書き込んだものか、出版社や校訂者などが

『そのはずだ』

と解釈して書いたものかはつきりしないことが多いからである。

ここまで二十小節足らず弾いたところで、三浦が演奏を止めて、

「良いじゃないですか」

と嬉しそうな声で、

「弾きながら、いつもよりも何か前に前に進むような感じがしたわ」

ところが大藤は、敢えて三浦の言葉を打ち消すような調子で、

「杵にはめられたようで、窮屈でかなわんよ」

と吐き捨てるように言った。それを聞いた柏木は、大藤が本当にそう思ったのではなく、このやり方に

異を唱えるためにわざと言ったのではないかと思つた。

「三浦さんと大藤さんの言うことはまったく反対だね。同じことをしていても違う意見が出るんだね。僕は、どちらの言い分も理解できるね。僕自身、三浦さんが言うようにこれまでよりもどのフレーズにも気を使って弾いたね。つまり、いつもは何気なく弾く箇所が結構あったと思つたね。でも、確かに

今度はこっち、次はあつちと手首を掴まれて引つ張られながら歩いているみたいな感じは否定できないね。すべてこの通りでなくてもいいのかもしれないけど、例えばこれを何回かやって自分自分の中で消化して、自分のものとして書き込みがなくてもこれみたいにしてすべてのフレーズ、すべての音に意味をこめて弾いたら、良い演奏ができるかもしれないと思つたよ。このやり方は案外良いところがあると思つ

たね」

「録音、聴いてみましょうよ」
「わかった、ちよつと待って」

柏木が、録音機を操作して、いま四人で弾いてきたところを聞くことになった。四人とも真剣な表情で自分の前の譜面を見ながら聴いた。聴くと言つてもいま演奏したのは時間にすると僅か二十秒ほどである。

録音の再生が終わったとき、誰も発言せず譜面を見たままである。弾いたことを思い出しそれに聴いたことを重ねあわせて反芻しているのだ。柏木が最初に発言した。

「書き込みに従って弾いたつもりだけど、自分がそのように弾いたと思っただころも、必ずしもその通りになっっていないね」

「そりゃ、我々の場合は、何回か注意深く練習しな

いと、書いてある通りには行かないものだよ。普段でも思い通りになんか弾けないじゃないですか」と出口。

大藤が発言しそうになつたので、みんなはまた否定的なことを言うのかと思つたが、違つていた。

「もう一回録音しながら弾いてみようか」

「わかりました、僕もそうしたいと思つていました」と言いながら、柏木が手際よく録音をスタートさせ

た。四人はさつきと同じところを弾いた。大藤だけが急いで譜面を入れ替えた。弾き終わるとすぐに大藤が、

「もう一回」

と叫びながら、また譜面を差し替えた。みんなは黙つてもう一度始めから弾いた。弾き終わったとき、また大藤、

「実は今の一回目は、柏木君の書き込みがないいつ

もの譜面で弾いて、二回目は書き込みに従って弾いてみたんだけど、録音でどんな風になっているか聴いてみよう」

それで大藤は弾き始めるときにバタバタと譜面を入れ替えていた意味がわかった。柏木だけでなく、このやり方に興味を感じていた三浦と出口も、大藤が興味を持ち始めたのかと思った。柏木は直ぐに再生の準備をした。昔のテープ録音と違って、いまの

デジタル録音では、巻き戻しの手間がないので直ぐに再生できる。今度もみんな無言で録音に耳を傾けた。続けて録音した二回分を聴き終わると、出口が大藤に聞いた。

「大藤さん、どうでした？」

そう聞かれた大藤は少し考えるように首を傾けながら、

「うーん。確かに違いはあるね。四重奏を組んで長

年いろいろな曲をやつてきた僕たちの中には古今の傑作を前にして、幼稚園生のような棒弾きをする者は一人もいないから、これまでもそれなりにみんな感じたり考えたりしながら表情をつけて弾いていたと思うけど、このように書き込みのある同じ譜面を見ながら弾くと、確かに音楽の方向性は明確になると思うよ。ただしその方向性は僕たちの四重奏団の自発的な方向性じゃないけどね」

柏木は、大藤がこのやり方に賛成しているのか、
そうでないのかよくわからなかった。出口が付け足
すように言った。

「だから、これをテキストとして練習して、ある程
度テキストどおりに出来るようになったら、書き込
みのない譜面で各自のセンスを加味しながら演奏し
たら、我々の四重奏の演奏と言えるものになるんじ
やないの？」

「つまり、先ずはエマーソン色に洗脳すると言うことだね？」

「でも、何か新しいものに取り組むときは、大なり小なりこう言った過程があるものじゃないかね」

「芸術の世界では、猿真似は軽蔑されるよね」

「そう言うけど、世界の大家でも初めは先生につくことから始めるじゃないですか」

「本当に大家になっっている人は、先生の言いなりに

ならなかつたと言うエピソードがあるものだよ。誰かの言いなりになつて育つた人は、小手先だけは器用だけど、他人の心を打つような演奏ができるようにはならないよ」

柏木は、大藤と出口の議論は、自分達の現状から離れたところに行つてしまつていると思つた。このような異論を内部に含んだまま、このやり方を押しとおすのはよくないと思つた。

「まあ、世界の大家のことはともかくとして、われわれはこのやり方に全員賛成と言うことではないので、各自のセンスで弾きながら、時には話し合いながら進めると言うこれまでどおりの方法でいくことにしましょう」

こう柏木は纏めようとしたのだが、三浦が異論を挟んだ。

「でも変だわ。大藤さんもカルテットとして表情付

けが同じ方向を向いていることが明確になつたと、認めてらつしやつたじやないですか。私たちこれまでいつも自分達の演奏の録音を聴いては、みんな物足りなさを口にしていたじやないですか。少しでも改善の可能性があるのだつたらやつてみたらいいじやないですか。それから、さつき大藤さんは言われなかつたけど、譜面を変えて弾かれたことについてどう思われたのですか？」

「あれは、みんなは書き込みの譜面で弾いていたし、実は僕自身その前に書き込みの譜面を弾いていたので、書き込みを見る前にどう弾いていたのかよくわからなくなってしまうってね。比較してみようと思っただけど、うまくいかなかった」と言つて苦笑いした。みんなも釣られて笑つた。

「結局、表情のある演奏は、表情のない演奏を駆逐するんだよ」

出口が『悪貨は良貨を駆逐する』というグレシヤムの法則をもじつて言った。

「グレシヤムの法則も時代や、貨幣制度によつて意味が變つてくるんだよね」

大藤は横道にそれて、出口の言うことが良い例でないと言いたかつたのだろうか。

「横道にそれないですよ」

三浦が少しいらいらした口調で言った。柏木は、社

会問題に詳しいことを自負しているいかにも大藤らしい応答だと思った。しかし大藤は冗談のつもりではなかつたようだ。

「横道じゃなくて、まさにそこなんだよ。表現も時代により、考え方により、つまりは人それぞれによつて違つてくると言うことだから、やっぱり僕はエマーソンカルテットの語り口をそのまま真似するのは嫌だね」

三浦も真剣だった。

「いずれにしても、私たちにはより良い演奏を目指したいって言う願望があるわけでしょ。この点に異存がある方は？」

「依存なんてないさ。そのために繰り返し練習しているのじゃないか」

出口と柏木も、そのとおりでと言うように首を縦に振った。三浦が続けた。

「だったら、そのための柏木さんの折角の提案を、やってみもしないで拒否しないで、少し実行してみたら、効果をみたらどうなの？」

「僕もそう思うな」

出口が、いつもの通り穏やかに言った。

「やっぱ僕は、エマーソン色に染まりたくないな。一旦そうなってしまったら、本当の自分が何色だったのかわからなくなってしまうそうだよ」

大藤は先ほどの意見を変えようとしなない。三浦がややきつい調子になつて、

「それは確固たる自分が無いから、自分を見失つてしまふつて言うことじゃないですか」

「そうかもしれないけど、もしそうならなおさら自分の頭と言うか、心でしつかり考えて自分らしい音楽を作る努力をしなければならぬと思ふんですよ」

このような調子で議論は止らなかつたが、何となくみんなくたびれてきて発言も散漫になつてきた。この日は、折角集まつたのだからと柏木の書き込み楽譜は、とりあえず各自持ち帰つて弾いてみることにして、今日のところは各自持つてきている普通のパート譜で《不協和音》の練習をすることになつた。この曲は、これまでも集まつたときに何度か弾いたことがある。室内楽好きの者なら誰でもどこかで

弾いた経験がある曲だ。今回取り上げることにしてからは最初の練習だが、合わせはスムーズに進んだ。ただ柏木の件があつたあとだけにみんな作曲者の指示がない箇所を弾くときにも、何となく何かをしなければならないような気がして、多少抑揚をつけてみたり、音量の差をはつきりつけたり、音色を注意深く選んで弾いたりするのだつた。そのこと自体柏木効果があつたと言つていいかもしれない。しかし

それは各自が自分の思いついた場所であれこれするだけなので、四重奏全体として一つの音楽として纏まった動きにはなっていなかった。

この日は四つの楽章を一通り合わせてから、次の練習を二週間後と決めて終わりにした。

柏木の書き込みを各自のパート譜に書き写すかどうかということについては、何も決めなかった。柏木は次の練習までにそうして欲しいと思ったが、先ほ

どの議論があつたので言い出せなかつた。他の誰か
らもそれについての確認の言葉はなかつた。

柏木にはすつきりしない気持ちが残つたが、大藤
が書き込みのあるスコアを柏木に返さないで、自分
の手提げに入れて持ち帰つただけでもよしとするこ
とにした。

〔十一〕

ところが、一週間後大藤から柏木、出口、三浦の三人に同時にシヨツキングなメールが入った。

「四重奏の皆さんへ、突然で勝手な申し出ですが私は四重奏を辞めさせていただきます。理由は仕事が多忙になりおまけに体調もよくないことが多いからです。どうかご了承ください。皆さんは良いチエロ

の人を見つけてこれまでのように活動されることを願っています」

本当に突然であつた。メールを受け取つた二人は、とつさに先週の練習のときの柏木の書き込み楽譜の件での議論を思い出した。結論には至っていないが、雰囲気としては大藤一人が反対を唱え、後の三人はどちらかと言うと賛成のような態度だったのだ。とは言え、彼らの四重奏にとって大藤の存在は大き

かった。室内楽の経験が豊かなだけでなく、結構技術も持っていて、しかもかなり音楽性のある演奏をするので、四重奏の音楽作りにはみんな頼りにしていたのである。

柏木は自分が余計なことをしたのが原因だと思つて責任を感じた。こうなつてあらためて考えてみると大藤は、自分がこの四重奏団の音楽作りをしてきたのに、柏木が大藤のやり方に不満があつて、エマ

ーソンカルテットの演奏の模倣をしようと手間のかかる準備までしてきたことにプライドを傷つけられたのかもしれないと思った。そうだとしたら、そんなつもりはないことを一言大藤に伝えるべきかと考えた。しかし、そんなつもりはないと言つても、実際に柏木がこれまでのこの四重奏の作る音楽に物足りなさを感じたから、何とかしようとして、みんなが阿弥響で忙しくて四重奏の練習がしばらくない期

間を利用して、素晴らしい演奏だと思っ
ているエマールソンカルテットのビデオを
詳細に聴いて、それを模倣できる
ようにスコアに書き込んでみんなに配
つたのである。その作業をしていると
きは、良い思い付きだと思つて、大藤
のプライドを傷つけるなどとは微塵も
考えなかつた。みんなが良いアイデア
だと言つて喜んで世界的な演奏家のや
り方を学ぶ姿しか頭になかつた。それ
にしても、あれほど強行に反

対するほどのことだろうか。そのやり方にあまり賛成できないのなら、みんながやってみようと言って、とりあえず一通りやってみて、エマーソンカルテットの演奏で、自分達も気に入ったところだけを取り入れると言うことでも良かったのではないだろうかと柏木は思った。しかし、電話やメールで謝ったりすることではないと思うのだった。

その夜三浦が柏木に電話してきた。

「大藤さんからメールあつたでしょ。びっくりね。でも本当に忙しかったり体調がよくなかったりが理由でしようかね。あの書き込みが頭にきたって言うことないですかね。そうだとしたら意外に心の狭い人ね」

「僕が余計なこととしてしまって、みなさんに迷惑かけてしまつてすみません」

「柏木さん、ぜんぜん悪くないわよ。私は去るもの

は追わずでいきたいわ」

「でも、「誰か良いチエロの人を見つけて」、なんて言われても、大藤さんほどのチエロはそうそういいいからね」

「すぐには思いつかなくても、きつといるわよ」

〔十二〕

結局、柏木たちは大藤に代わるチェリストを見つ
けることもなく、活動は自然休止状態になった。柏
木は阿弥響をゴタゴタで辞め、いまは自分達の演奏
をより良いものにしようと思つて作成したエマーソ
ンカルテットの演奏を詳細に楽譜に記録したものが
原因で長く続いてきた四重奏団を解散状態にしてし
まった。

柏木がオーケストラと四重奏の二つの演奏の場を

失うことになったこの出来事に関して、柏木に過ちはなかった。それにもかかわらず災難は柏木に降りかかった。柏木は

「どうしてこうなるの？」
と言いたい心境だった。

数日した夜、出口から電話があつた。チエロをやってくれると言う人がいるから一度一緒に合わせて

みないかと言うのだ。出口の話によると、その人物は門田貞子と言って、東京の大学で学生オーケストラに入っていて、去年卒業して地元の会社に就職し、実家から通っている人で、室内楽が好きで学生時代も四重奏をしたことがあるのだそうだ。そして

「試しにやってみて、皆さんがいいって言われたらお願いしたい」

と言っていると言うのだ。出口は一生懸命チェリス

トを探していたのだらう。思いの他早く見つかったものだ。と柏木は思った。

急遽、門田参加による練習会の日取りが決められ、場所もいつも練習している公民館の予約ができた。出口はすでに三浦には門田のことを話していたようだ。

門田貞子と四重奏団の三人は約束通りの時間に公

民館の玄関ホールに集まった。出口があらためて門田をみんなに紹介した。床に立てた薄緑色のチェロのケースに掴まるようにしていた門田は、聞き取れないような小さな声で自分の名前だけを言って頭を下げた。柏木も三浦も、門田のその様子に頼りなさを感じたのだった。

四人は鍵を受け取って予約していた部屋に入り、机と椅子を片付けて四重奏が出来るスペースを作っ

た。机や椅子を片方に寄せるとき、門田は手伝わな
いで隅のほうに立っていた。そうして出来たスペー
スに椅子を四つ並べてから、それぞれ譜面台の用意
を始めた。出口が、

「門田さんここで弾いてください」

と言って、一番端の椅子を示した。門田も自分の譜
面台を開き始めた。門田の楽譜は出口が用意して来
ていた。今回も《不協和音》を弾くことにしている。

楽器を出してからしばらくの間それぞれ勝手に指慣らしをした。これがいつものこの四重奏団のやり方だ。門田はと言うと、出口から渡されたばかりの楽譜を開いて見ていたが、《不協和音》の冒頭を弾き始めた。話し声と同じように小さな音だったが、音色は美しい。みんなは自分の指慣らしを続けながら、耳は門田の弾く音に集中していたのだ。門田はしばらくくゆっくりした序奏を弾いていたが、直ぐに主部

の十六分音符の速いフレーズをさらい始めた。鮮やかな指さばきだ。みんなは思わず自分が弾くのをやめて門田に注目した。それに気が付いて、門田も弾くのを止めてしまった。

「凄いじゃないですか。何処の大学で弾いてらしたの？」

三浦が聞いた。

「一応、芸大です」

「それじゃ、プロの方？」

「いや、一般の会社の事務員です。プロの音楽家を一旦は目指して大学に行つたのですが、専門家になるのが嫌になつたもので」

と相変わらず、見事なチェロの演奏とは別人のような小さな声で言つた。

「じゃ、やってみましようか」

出口が言つたので、それぞれ《不協和音》の最初

のページを開いて、柏木が

「どうぞ」

と言うように門田に合図した。この曲の冒頭はチェロのゆっくりとした八分音符で始まる。門田は先ほどのためし弾きとは違って静かだが引き込まれるような見事な音色で弾きはじめた。三人ともその美しい音色に圧倒されながらそれぞれの出を待った。それはアマチュアの室内楽奏者として自負している大

藤をはるかに凌ぐ演奏だった。四重奏では誰かが見事な音楽性で弾くと、それに触発されてみんな音楽の世界に引き込まれるような作用が働く。もちろんそれぞれの技量でしか演奏できないのだが、それぞれの最大の音楽性を表すものなのである。

柏木は、演奏しながら門田の方を見た。若く美しい姿で音楽に没頭するように伏し目がちに楽譜を追いながら、意識は音楽の中にいるような姿に見えた。

ここで柏木は目が覚めた。夢だったのだ。正夢かもしれない。柏木は今日の門田が参加しての合奏に期待が膨らんだ。

〔十三〕

四人が、練習会場に時間通り集まった。出口に紹介された門田貞子は、蚊のなくような声で

「門田です」

と、名前だけを言った。楽器のケースも薄緑色だ。ここまでは、柏木が見た夢と同じだ。みんなが指慣らしを始めると、門田も指慣らしを始めた。ひどく遠慮した小さな音だった。音が小さいのは柏木の夢と同じだったが、その音色は柏木の夢と違って特に魅力的なものではなかった。と言うより、何かゴーゴーした不快でさえあるような音だった。門田はそ

のゆっくりした序奏の部分しか弾かなかつた。

しばらくして出口が、

「じゃ、始めましょうか」

と促した。柏木が門田の方を見たが彼女は始めよう
としない。今度は

「どうぞ」

と声を出して門田に弾き始めるように合図したが、
門田はきよとんとして柏木を見た。柏木は、

「最初はチェロのソロです」

と言うと、門田は

「あつ」

と小さく言つて、弾きはじめた。門田が弾きはじめた八分音符は非常にテンポが速かったので柏木が、それを制して、

「これくらいで始めましょうか」

と言つて、ゆっくりとしたテンポを示した。門田はあ

らためて柏木の示したのに近いテンポで弾きはじめてた。しかしそれもアダージョと指定されたテンポとは言えない速いテンポだった。

もちろんアダージョと指定されていても演奏者によつて多少の違いはあつて当たり前だが、それにしても速すぎると思った柏木は、もう一度止めて、

「もう少しゆっくりの方がいいね」

と優しく言った。このとき柏木は、門田は大学で室

内楽の経験があると出口が言っていたが、少なくとも室内楽好きなら誰でも知っているようなこの曲を知らないらしいなと思った。

今度はアダージョと言えるテンポになった。しかしその音色も、音符の強さも、長さ加減も、つまりニュアンスはこの部分の感じを掴んだものとは程遠い棒弾きであった。みんなもそう思ったが、一生懸命楽譜を追っている門田に失礼にならないように、

そのまま続けた。

序奏が終わって速いアレグロに入って、今度はチエロ以外の三人が軽快なメロディを弾き始め、数小節待ってからのチエロの入りで門田は入ってこなかった。

「もう一回アレグロからやりましょう」と出口が言ってやり直したが、今度も門田は入れなかった。門田は小さな声で、

「すみません。この曲知らない曲なんで、」
と言った。

「それじゃ、いきなりで失礼しました。じゃ、モーツァルトの四重奏でやったことがある曲ありますか？」

出口が、小さくなつて顔を真っ赤にして今にも泣き出しそうな門田を気遣いながら聞いた。門田は、相変わらずおずおずとした調子で、

「アイネクライネだったら、」

と言ったので、出口は鞆からその楽譜を出して来て四人に配って、

「後ろの方のページにありますから」と言っただ。

みんなが《アイネ・クライネ・ナハト・ムジーク》の最初のページを見つけたのを見届けたところで柏木が合図を送った。今度は四人が一斉に元気良く出

る。これは門田も元気良く弾き始めた。しかしその音も他の三人の音よりも頼りなく、生氣にかけていた。しかし何とか第一楽章のおしまいまで止らずに行つた。門田は何箇所も間違つた音や、間違つた場所で音を出したりしたが、みんなは構わず弾き続けた。

みんなは、気の毒だが彼女は自分達の四重奏の仲間に相応しくないと確信していた。ただ何も弾

かずにこの日解散したのでは、折角来てくれた門田に失礼すぎると思つて楽章の最後まで弾いたのだつた。《不協和音》の初めの方と、《アイネ・クライネ・ナハト・ムジーク》の第一楽章だけでは、集まつてからまだいくらも時間は経つていながつたが、出口は、

「今日、門田さんにはいきなり準備も何も無しで来ていただいて悪かつたですね。われわれは何年もや

っていて、今日の曲も何回もやっているのだから。今後のことはまた相談しましょう。今日のところは折角みなさん集まってもらったけど、少し早いけどこれで終わりにしましょう」

普通ならこういうときにも、もう少し出来そうな曲でほどの時間まで遊んでから、解散するのだが、出口も自分が紹介した門田があまりにもふがйнаかったの、それ以上続ける気がしなかったのだ

った。

翌日の晩、出口から柏木と三浦に電話で、あまりのレベルの違いについて行けそうにないからと門田が辞退したことを伝えてきた。柏木も三浦も当然そうなるだろうと思っていたので驚かなかつた。

しかし、それは三人の大きな判断ミスだった。その判断ミスで得がたいチャンスが柏木たちは逃した

のだ。なぜなら、彼らはあの初顔合わせで、あまりのふがいなさに門前払い同様にした門田貞子が、なんと西南フィルの『わが街の名人達』と言う公開テレビ番組でハイドンのチェロ協奏曲を弾くと言う情報を得るのである。それを知った四人は我が目を疑った。あるいはアマチュアが出演する番組だから、あんな調子だが何かの間違いで審査を通ってしまったのだらうか。それにしても全国放送の番組だ。放

送局がそんなお粗末なことをするとは考えられない。

〔十四〕

二カ月後だった、三人は柏木の家に集まってその『わが街の名人達』と言うテレビ放送を見てさらに驚いた。彼女が弾いたのはハイドンの二曲ある《チエロ協奏曲》でも、第一番よりはるかに難しいと言

われる第二番の方だった。番組では第一楽章を三分の一くらいの長さに縮小したバージョンだったが、何とプロ顔負けの堂々たる演奏だったのだ。テレビに映っていた顔は間違いなく一緒に四重奏をした門田貞子だったが、チェロに関しては、楽器を持ってステージに現れたときから別人のようだった。ただ、三浦は楽器の色が四重奏をしたとき持っていたものよりも薄い色のようにだと言ったが、みんなはライト

などの調子でテレビ画面での見え方はわからないと
言うことになった。

名前だけでなく、司会者に紹介された、彼女が住
んでいる街も、会社員であることも出口から聞いた
とおりである。それだけでなく地元に戻って一般の
会社に就職しているが、出身校は、柏木の夢と同じ
芸大だったのだ。そしてプロの音楽家の世界が嫌で、
音楽の道に進まなかったことも、西南フィルのプロ

の前であるにもかかわらず、はつきりと言っていた。そのときオーケストラのメンバーから笑いが漏れていた。演奏だけでなく、彼女のはきはきした受け答えも、四重奏のときとあまりに違っている。一緒にテレビを見ていた三人には、何が起きているのかわからなかった。

よくよく考えてからにすればいいのに、出口は性

急にも、あらためて四重奏に迎えたいと言う趣旨の電話を門田の家にかけたのだった。ところがこんどは、出口の申し出は門田に断わられた。大学の友達でプロの道に進まなかつた者同士でカルテットを組むという理由だつた。

出口が、テレビで見た演奏と四重奏のときの演奏が随分違っていたことを言うと門田は、あの時我々のところに来たのは双子の妹で、本人は約束の前日

の夜、翌日にあの放送局での打ち合わせに来てもらえないかとの連絡があつて、急遽そちらに行つたのだそうだ。

妹には、皆さんと一緒に演奏するのではなく、事情を話して、私が出来れば参加したいことをお伝えして、いろいろ四重奏のようすを聞いて来てくれるように頼んだのだそうだ。チェロを持って行って弾くようなことは頼まなかつたのに、妹は自分も学生時

代にオーケストラに入っていたので、黙って楽器を
持って公民館に行つて、姉に成りすましてあんなこ
とになつてしまつたと言ふのだ。

門田が言うには妹は大学に入つてから、子供のこ
ろから習つていた貞子のチェロに憧れてチェロを始
めたが、あまり熱心な団員でもなかつたので皆さん
には大変迷惑をお掛けしたと謝つた。妹から話を聞
いてびっくりしたが、迷惑をかけたので辞退したと

言うことだった。それに大学の仲間と四重奏を組む話も持ち上がったので、そちらに専念することにしたと言うのだった。

門田貞子としては地元で気軽に集まれるメンバーと言うのは魅力だったらしい。大学の仲間との四重奏は、地元は門田一人だけで後の三人は大阪、名古屋、東京と言う遠距離メンバーであった。門田貞子は、妹が変なことさえしなかつたら皆さんのところ

でお世話になれたのにと残念がったそうだ。

しかし出口は門田貞子の言葉通りには受け取らなかつた。確かに姉の身代わりを演じた妹のチェロはひどいものだったが、専門教育を受けた姉の演奏を普段から耳にして、それでチェロがやりたくなつて、大学のオーケストラに入ったのだから、出口たちの演奏を聴く耳を多少は持っているはずだ。妹は、姉が一緒にするようなレベルのメンバーじゃないから

辞めた方がいい、くらいのことは言ったかもしれない。

出口は、この結果は双方にとって良かったと思つた。もちろん専門的なレベルの彼女にとっては、自分と見合つた仲間とするのが良いし、出口たちの四重奏団にとつても、レベルが飛びぬけている若いメンバーは、世代の違いもあつて上手くいかない可能性が高いと思つたのだ。

かくして出口が入手した貴重な情報によるバタバタ劇は終わり、彼らの休止状態は続くことになったのである。

阿弥響がある三浦と出口はまだしも、柏木は演奏機会のないまま一人基礎練習などをする日々が続くのだった。

〔十五〕

しかしこれには後日談がある。門田貞子たちの遠距離四重奏は日程と旅費などをやりくりしながら月に一度程度の泊り込みの練習日を確保して、半年後には大阪と東京で小さな発表会まで行なうと言う熱い集団であった。しかし発表会がすむとある種の燃え尽き症候群のようなものに襲われて、しばらく練

習を休止することになり、その後はメンバーそれぞれ仕事の忙しさなどにかまけて開店休業状態になってしまった。一年近くも、メンバーの誰からも再会の声は発せられなかった。

門田は音楽のない、仕事だけの日々には耐えられなくなつて出口に、もうチェロはみつかったかを訊いてきた。出口がまだみつからず四重奏は休止のままだと言うと、自分でも良かったら参加させてもらえ

ないかと言ってきた。出口は、三浦と柏木に相談して、是非参加して欲しいと返事した。

門田貞子を加えた四重奏は、久しぶりに喜ばしい再生を果たしたのだった。しかし半年もしないうちに想定外の問題が発生してしまふ。柏木と門田が道ならぬ恋に陥って、柏木の家庭は崩壊する。ともに家庭がありながら秘かに柏木を慕っていた三浦は、門田に対して不快感をあらわにする。門田の参加で

一段とレベルは上がったが、新たな不協和音の発生で、結局四重奏団は一年も経たないで解散に至ってしまう。

その後柏木は古巣の阿弥響にコンサートマスターとしてではなく一奏者として復帰することになる。そのとき柏木とは別れていたが門田も、柏木の紹介で阿弥響に入団したのだった。門田は皮肉にも大藤と並んで弾くことになった。

かつての四重奏の仲間がみな阿弥響と言う集団の中にいたが、柏木たちの四重奏が復活することにはなかつた。

(了)

*この物語はすべてフィクションであり、登場する人物その他はすべて架空のものです。

編者あとがき

著しくIT技術の発達した今日、かつて発表の機会に恵まれなかった無名アマチュア作家に大きなチャンスが到来しました。昨年末のAmazonのペーパーバック進出はさらに力強い追い風となっています。

故山中與隆は、定年後すぐに退職し、アマチュア

としてチェロを弾いて室内楽を好きなだけ楽しみな
がら第二の人生を過ごしておりましたが、それと同
時に、作家になることを目指して文筆を続けると宣
言し、毎年のように懸賞に応募していたようです。
それは近年まで続けられていたことがパソコンの中
身から分かりました。傍におります妻の私は、とう
に文筆を止めてしまっていると思っておりますの
で、それを知って愕然としました。

ここに、山中與隆が書き残しましたものを順次発表していこうと決心しました。なんらかのきっかけで本作品をお手にとって頂けたご縁を嬉しく思います。今後発表する作品にもご期待下さい。

またブログ ([URL:https://www.duoyamanka.com](https://www.duoyamanka.com))
への投稿の形でも発表していきたいと考えております

すので、あたたかく見守っていただければ幸いです。

二〇二二年四月

山中伶子

※1 山中與隆（やまなかともたか）の名前について

與隆の「與」の字は「与」の旧漢字です。従って、入力時に「よ」で変換をかけると、下位ではありませんが、表示されません。

著者紹介

山中與隆（やまなかともたか）

一九三九年～二〇二一年

「名古屋生まれ、広島大学卒。小学校の教員暦七年、その後一般のサラリーマンを三〇数年。いまはリタイアして悠々自適の生活を享受中。大学時代に始め

た弦楽器（初めはヴィオラ、その後チェロ）を今も
続けている一方、小説や随筆の執筆にも力を入れた
いと思つています。

書くものとしては文学的なものから推理もの、歴
史もの、恋愛もの、ファンタジー、社会派的なもの
などジャンルを選びませんが、常にベースには何ら
かの形で音楽が絡んだものにしたたいと考えています。
ライフワークとしたい目標は、音楽を前面に出し

たもので読者の方々に小説としての読み応えと、そこに登場する音楽を是非聴きたいと思ってもらえるような、しかも私の著述によつてその物語にも音楽にも感動してもらえらるような作品を完成させたいと思つています。」

著者プロフィール(二〇一〇年五月)より

今後の出版予定作品

今後は、既刊の電子書籍のペーパーバック版を出版の予定です。

既刊作品

|| 電子書籍 ||

『都志見往来日記』 異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

蒸発の衝動

インテルメッツォ

爆発

妻が消えた

既刊の短編

アマールスを聞く男

オセロー

テンペスト

定年の晩

魂の三重奏

ロシアンルーレット

ささゆり

才能移転

ある三文作家が見たもの

けんか

袖ふれあうも

ミスターフエイト

峠を越えて嫁入りした女

花火見物

ある小学校教師の敗北

三坂峠 二話

第一話 ≪お蓮・勘兵衛 悲恋の墓≫

第二話 ≪緑のトンネルで≫

阿弥陀山

ゴーシユの華麗なる転身

ある男の臨終

野の寂しさ

四重奏

親も子も老いて

わしや、ただの山ザルじや

リヨウコからの電話

カルテットの風景

「オセロ」手紙版

出来る間に、出来るだけ

なぜ？

紀行文

広島百山と吉和冠山登山

ひとり、山を歩く

短編シリーズ String Fiction Series

1 弦楽四重奏団 a

2 弦楽四重奏団 b

3 親和力

- 4 トリオ・ソナタ
- 5 不協和音
- 6 解散
- 7 音楽のある生活
- 8 ビオラを弾く生活
- 9 疑問
- 10 生きがい
- 11 激情

12 カルテット

最終三作品

裸の王様は何処へ行く

むかし俺がクマだったころ

ある兵士の物語

Ⅱ既刊のペーパーバックⅡ

『都志見往来日記』異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

短編集テンペスト他

短編集2―ある三文作家がみたもの他

短篇集3―ミスターフェイトほか

String Fiction Series 05

不協和音

2022年10月30日初版発行

著者：山中與隆

編集：山中伶子

<https://www.ac-illustr.com/>

・タイトル：弦楽器グラデーション

作者：t-dunさん

イラストのID: 2610321

・タイトル：花のフレーム2(黒)

作者：猫エンジンさん

イラストのID: 1587380

<https://www.silhouette-ac.com>

・タイトル：譜面台

素材のID: 105365

・タイトル：譜面台

素材のID: 105366

<https://www.photo-ac.com>

・タイトル：チェロ

作者：r*****mさん

写真のID: 3669919

©Tomotaka Yamanaka 2022

<https://www.duoyamanka.com>
